

Title	故新城新蔵博士と事變下の支那文化
Author(s)	荒木, 俊馬
Citation	懐徳. 1938, 16, p. 17-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88998
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

故新城新藏博士と事變下の支那文化

荒 木 俊 馬

去る八月一日午前五時、新城博士が戦亂下の南京の病舎に客死せられた。これによつて我が國の自然科學界及び教育界が一個の偉大なる人物を失つた事は言ふ迄もないが、此の損失は我が國現時の時局に於て特に大きく感ぜられるやうに思はれる。

八月十日上海中部小學校に於て舉行せられた自然科學研究所葬に於ける支那方面艦隊海軍特務部長野村直邦少將の弔辭の一節に、

『而テ夙ニ東洋永遠ノ平和ヲ顧念セラレ其ノ目的ヲ達スルニハ實ニ日支新生文化ノ提携ニ在リトノ深キ信念ヲ有シ已ニ功成リ名遂ゲタル老齡ノ身ヲモ顧ミズ卒先渡支シテ之レガ實現ニ邁進セラレタリ。今次事變ノ勃發ニ際シテモ敢然戰亂ノ上海ニ踏ミ止マリ所員ヲ督勵シテ研究所ヲ死守シ日夜生命ノ危険ニ暴露シツツ研究ヲ續ケ以テ我國科學者ノ崇高ナル態度ヲ中外ニ宣明セラレタリ。其ノ剛毅沈着ハ將ニ永遠ニ日本國民ノ以テ鑑トスルニ足ルモノナリ。加フルニ先生ハ此ノ間寸時ト雖モ陸海軍トノ提携ヲ忘レズ、其ノ依囑ヲ承ケ身ヲ挺シテ、戦後稍モスレバ散逸セントスル貴重ナル學術資料蒐集整理

ノ大業ニ當事セラレ只管斯業ノ完成ニ努力セラレツツアリシ際不圖モ極暑病魔ノ冒ス所トナリ首都南
京ニ於テ職ニ殉ゼラル。其ノ最後タルヤ正ニ武人ノ戰場ニ斃ルルト等シク吾等ノ敬慕措ク能ハザル處
ナリ。誠ニ男子ノ本懷ト謂フ可シ。今ヤ皇軍ハ連戰連勝將ニ敵ノ死命ヲ制セントス。此ノ空前ノ戰果
ヲ完フシ東洋平和ノ基礎ヲ定メンガ爲ニハ先生ノ識見ニ俟ツ可キモノ多ク我海軍ニ於テモ今後更ニ先
生ニ期待スル所甚大ナルモノアリシニ拘ラズ卒然トシテ薨去セラル。誠ニ哀惜ノ念ニ堪ヘズ』とあつ
たが眞に同感の外はない。

今次の事變は言ふ迄もなく支那四億の民衆を相手としての戦争でもなければ、支那五千年の文化を
破壊せんが爲めの攻撃でも無い。不法惡逆の蔣政權を膺懲打倒して東亞永遠の平和を確立せんが爲め
の聖戰である。勿論戦争は非常手段である。従つて用兵作戰上の必要の爲めには如何に貴重なる文化
施設と雖も犠牲とするは止むを得ない所である。

『然し、戰鬪直後の混亂に乗じて占領地域内に於ける支那五千年の文化の記念物なり、支那諸學者多
年の苦心研究の業績なりが跡もなく亡び去るのは文化人として見るに忍びざる所であるのみならず、
正義皇軍の名譽にも關する事で、此れ等を整理保護して散逸を防ぐのは、舉國一致、國家總動員體制
下の現時局に於ける我が國の學者の任務である』とは新城博士の切實なる抱懷であり、また熱烈なる
主張でもあつた。それにしても武人の積極的活動に比して知識人の如何に躊躇消極的なる事よ。事變

突發後、切齒扼腕、博士の熱血は遂にこれを坐視する事能はず、老軀を顧みるいとまも無く身を挺して自ら立たれた。歌つて曰く、

老の將に至らんとするを知らざりし

その人のごと行かんとぞ思ふ

爾來、或は北京に或は南京に、事實上東奔西走南船北馬して、戰後に於ける支那諸大學諸研究所の再生や教育機關の復興に心痛盡力せられたのであるが、今回も南京に於ける古文書、書籍、自然科學の標本や歴史參考品の逸散紛失を防止し、これが保護管理の爲めの關係調査團を指揮督勵して、烈日炎熱の南京城の内外を馳驅して居られた。されど戰亂下の南京は事實瘡痍の地で、其の激務は六十六歳の老軀には餘りにも重過ぎたのであらう、七月廿四日發病以來、同仁會病院の懇篤なる療養も空しく、極めて悪性の疫魔は僅か一週間にして博士の生命を奪つて仕舞つた。眞まことに哀悼の極みだけではない、『正に武人の戰場に斃るゝと等しく』壯烈鬼神を哭せしむるものがあるが、古人の謂へる『斃而後已』とは正に先生の場合の事であらう。

先生は偉大なる自然科學者であつた。元來科學者は往々にしてコスモポリタンの思想に酔ひ、或は又極端な個人主義に陥り、動もすれば天下國家を忘れ勝ちになる傾向が無いではないが、自然科學者にして先生ほど忠君愛國の熱情に燃えて居た人物は尠からう。畏れ多い事ではあるが

明治天皇陛下の御製は先生の最も愛誦せられた所で、毎朝眼を醒されるや、その幾つかを朗々と朗誦せられるのが先生の日課の一つであつたし、又、五箇條の御誓文は先生の常に服膺せられた指導原理であつた。

明堯舜孔子之道。盡西洋器械之術。何止富國。何止強兵。布大義於四海而已。

とは幕末の英傑横井小楠の詩であるが、先生の理想もまた此の精神に外ならず、先生が日支提携を高唱せられ、東洋永遠の平和の爲めに専心せられたのも此の理想に基くものである。自然科学者として先生ほど支那に對して大なる理解と愛情とを有した人は古來無からうと思はれるが、それも決して一般の支那偏愛者の理解や愛情ではなく、常に我が日本の立場を忘れる事が無かつた。空襲下の上海に踏み止つて上海自然科学研究所を死守せられた如きも愛國の熱情と東洋永遠の平和の理想とが混然と結合した大精神の發露の一端に外ならぬと思はれる。

古人は『天下の憂に先ちて憂へ、天下の樂しみに後れて樂しむ』と言つたが、天下の憂に先つて恆に憂へて居られた先生が、後れてすらも樂しむ事が出來ず、紫金山下に斃れられたのは返す返すも遺憾であつて、悲痛の情に先き立つて唯々感慨無量と言ふ外はない。昭和十一年の十月頃詠まれた歌に、

三たび四たび神は召せどもいかにわれ

事おへぬまは行かじとぞ思ふ

と言ふがあるが、事業の完成はやはり若い弟子達の爲めに遺されたのであらうか。

* * * * *

* * * * *

筆者は過ぐる七月末、先生の病篤しとの報に驚いて、急遽南京に赴かんと準備したのであるが、不幸にも其の訃報は出發に先だつて達し、其の最後に間に合はざるのみならず、また其の死顔を拜する事をも得なかつた。

巨人の死は天も亦これを惜んだのであらうか。阪神の地を襲ふた風水害は鐵路を破壊し、幾回もの電車連絡の後、明石より辛じて汽車を獲、八月五日長崎を出帆したのであるが、其の夜の支那海は寂寥として波も立たなかつた。恰度上弦の月が南空、大火のほとりに懸り、太白は西に歳星は將に東天に昇らんとする時。月も大火も太白もそして歳星も、思へば皆亡き人の愛した星であり、また因縁深き星であつたが、静かな支那海の上、大虚空の中に、大機院殿宙寶元剛大居士の靈は今何處にありや。上海に於ける研究所葬も終つて、八月十四日私は能田、今井兩君と共に南京に向つた。車窓より見る茫々たる中支の平原は見渡す限り豊饒なる米作であり、雨後稍や水嵩を増した沼澤には可憐な水蓮

の花が咲き亂れて居る。戰鬪の過ぎ去つた中支一帶に再びなごやかな治安が訪れて、嬉々として戯れ遊ぶ支那の子供の群を見るにつけても、大機院殿の靈魂が東洋の平和を守つて居るやうに感ぜられた。

戦ひよしかはあれどもやがてまた

手を提へて行かんとぞ思ふ

これは先生が事變勃發直後に詠まれた歌であるが、此の希望のなる可く速く實現せんことを祈る。

十五日、約一時間の餘暇を利用して、陸軍特務機關の厚意による自動車を驅つて南京城外紫金山頂を訪れたが、正義皇軍の攻撃精神に文化を愛する細心の注意が拂はれたものか、天文臺の建物は完全に残つて居るのに、内部の諸觀測器械が無慘亂暴に奪取運び去られた跡を目撃して、支那人の誤てる抗日意識がかくも非文化的であるかに一驚した。嘗て獨逸軍退去後のストラスブルグ大學内の諸設備の整頓完全さが、佛蘭西人を感嘆せしめたと言ふ話などと思ひ較べると、新城博士の『支那文化の保護は、日本の學者が身を挺してこれに當らねばならぬ』と言ふ意見も恐らくは、かゝる光景を眼のあたり見られて感ぜられた事かも知れない。

南京城外の郊野には漸く秋色が加らんとする。晴れ渡つた紺青の空の下に、赤褐色の長江は一水遠く天際に流れて、偉風堂々我が帝國海軍の艤艦は纜を連ねて浮んでゐる。又南京城の内外には我が帝國陸軍の精銳、戰車、砲列整然として將に出動直前の姿にあるかに見えた。聖戰の中心地の今將に武

漢三鎮に移らんとするの日、南京城を訪れる可き平和を待たん心か、延々として連なる城壁の外、玄武湖上綠色一面の蓮にはまだ點々として白い遅咲きの花が見られる。

干戈を執つて戦つた武人の勳功は改めて言ふ迄もあるまい。

古來 青史誰不見

今見功名勝古人

新城博士亡き後に、筆墨を執つて東洋永遠の平和の爲めに戦ふ科學の戰士は誰ぞ。

* * * * *

八月二十一日急遽歸洛した筆者は、同日相國寺で執行せられた葬儀終了後、三たび感慨に耽つて故博士が遺された雜記帳の頁をめくつてゐたが、その中に三月十四日海外放送原稿『支那の文化に對して』と言ふのを發見した。原稿と言つても單に筋書のもの、上海から（用語は英語であつたらうと思はれる）放送せられた時の腹案で、先生の文章として茲に紹介するわけにも行かないやうであるが、先生の對支文化に對する考への一端を覗ふに役立つやうに思はれるので、若干補筆して私の拙文

の最後を飾らうと思ふが、論旨の連絡に不備の點があるならば、其の責は筆者にあつて先生には無きことを豫め斷つて置く。

『私は一九三五年以來滿三ヶ年上海自然科學研究所の所長をして居ります。上海自然科學研究所といふのは、日本が受取る團匪賠償金の一部によつて經營されて居る日支間の國際的純學術的研究所で、一九三一年より開所し、研究方面は純粹理科と基礎醫學で、研究員は約四十名、内約十名は支那人であります。年額經費約五十萬圓を費して居ります。今日まで既に相當の研究成績を擧げ、それ等は和漢文と歐米文との二種の出版物として發表し、關係學界に廣く寄贈して居ります。

此度の日支事變は、日本と支那とが一層深く提携して進まんとして却て一時的には相反抗し戰爭状態を引き起すまでに至つたものと思はれ、之れは誠に悲しむ可き事で、私はかゝる状態の一日も早く終熄せんことを望んで止まないであります。現に多くの支那の學者は事變のために深く内地に引退したために大多數の支那の研究所及び大學は事實上殆んど全く停止の状態に陥り、文化發展上甚だしき打撃を蒙りつゝあるのは遺憾の至りに堪へませぬ。私は事變後直ちに、北京、上海附近、南京、杭州等を視察しましたが、北京は幸にして市街戦がなかつたために、直接の被害を受けませぬでしたが、其他上海附近、南京、杭州等は何れも或は支那軍隊の駐屯のため、或は一般民衆の掠奪のために文化施設は相當の損害を受け、或は圖書、器械類、或は學者が多年の心血をそゝいで蒐集した貴重な標

本類などが甚だしく散亂し泥靴に踏みにじられつゝあるのは同學の友として見るに忍びない次第であります。私は取敢へず直ちに我が研究所の専門研究員を派遣し、軍部方面と協議して、それ／＼或は現場に於て、或は相當の場所に此れ等を集めて暫時的に保管するの途を講じましたが、是事はやがて支那文化復興の際に重要な要素となる可きものであると信じます。

私の仕事はただに支那學者が殘していつた文化施設を保護管理するのみに止らないのであります。我が研究所は其の性質上、日支間の國際的研究所であるにも係らず、從來の國民政府は動もすれば、かゝる關係を認めざらんとする態度をしましたがために、支那の學者と提携して深く支那の内地に入り根本的研究に従事することに對し支障が少なくなかつたのであります。此度の事變後は新しき政府の諒解を得て、本來の目的に向つて突進しなければならぬと思ひます。或は更に一步を進め、新しき政權が或は大學や研究所を設け、或は中等、初等の教育の施設を考案するに當つても、我が研究所が、これ等の文化施設に對して相當の助言と援助とを申し出づる事は多年支那の學界に對し相當の地歩を獲得してゐる我が研究所の責任であると考へて居ります。

なほ最後に臨み、此の機會に一言したいのは北京の南方周口店にある北京人の遺蹟、河南彰德附近にある殷墟の地域、山東曲阜にある孔子廟の一帶、山西省大同にある六朝時代の石佛の遺蹟等が我が日本軍部の特別の注意によつて完全に保護されて居ることで、是れ等は東洋文化發揚のために深く感

謝すべきことと思ひます。

これと對照して、私が甚だ遺憾に思ひますのは、支那の學者が退去するに當つて器械類の重要な部
 分を取り外して持ち去つたことで、紫金山天文臺の天文觀測器械や南京北極閣氣象臺に於ける地震器
 械などは其の實例であります。これは必ずしも學術に理解なき兵士の手によりて毀損されることを
 免れんがために持ち去つたものとのみ善意に解釋し得ざる實例があり、日本人の手に委ぬることを避
 けんとする單なる敵愾心に基いたものと認めざるを得ないのを甚だ遺憾とします。(下略)』